

# カテキズムへの回帰

内村 剛 介

『革命の教義問答』は著名である。私はまたそれを見る機会に恵まれないが、「キリスト教義問答」の原典にはお目にかかっている。

それはただか一〇〇ページほどの小冊子にすぎないのだが、今この本を手にするほどの者は、後年の革命家たちが年少の日につぶらな眼で読んだであろう姿を想い浮べて、ある種の感動を覚える。この表紙もこの文字も彼らの目や手に触れ、おそらくはその柔軟真摯な頭脳に永く消えぬ刻印を印したと思うのである。

「モスクワ、宗務院印刷局、一九〇九」——これが手もとにあるカテキズムの刊行場所、刊行年次である。版数は示されていない。版は無際限に無数に重ねられたから、その無数の量はもはや示すにおよばぬというわけで版数は示されていないのだろう。この「無数」はむろん無数の少年少女をも包みこんでいる。無数の少年少女とはつまりほとんど「すべての少年少女」ということである。当然ながらすべての少年少女はやがて成人するものである。表題がすでに論争的で、疑いようもなく闘争の総括を示してい

る。

広範なる

キリスト・カティヒジス

正教の、主たる、東方の教会

「広範なる」とはここでは「長大・詳密、広大な」の意であるとダーリ大辞典はいう。それは広辞苑の広に当るものといってもいいだろう。いわんとするところは「もつとも包括的であって、区々たる末説ではない」ということである。

「正教の」ということばは、このカティヒジスが正系・異端をめぐる論争を通じて成立したことを示している。次に、「主たる」であるが、その原語は「カトリチエスキー」である。これはむろん「カトリックの」を意味するものではない。カトリチエスキーはギリシャの「カトリコス」から直接に流れ出ている。つまりそれは「全的にして首長たる」を意味するものなのだ。

さて「カティヒジス」とは何か？ これについては本文冒頭の問答を引用するのが適切だろう。

問、正教カティヒジスとは何か？

答、正教カティヒジスとは、キリスト者の正信における訓戒である。神に仕え魂を救うためにキリスト者万人に対して説かれるものである。

問、カティヒジスという語の意味は？

カティヒジスはギリシャ語から移入したので声に出した発表を、つまり口頭の訓戒を意味するが、使徒以降の用い方に従って、キリスト者全員に必要なキリスト正教に関する根元の教えを意味している。(ルカ伝一章の四。行伝一八章の二五)

表題には次の付記がある。ここで私たちはこんどは政治と宗教との闘争の跡を見る。

「聖なる、支配の座にある宗務院が校閲し、学校の授業用として、かつまた正教キリスト者全員用として、

皇帝陛下の至上命令により、

刊行されるものである」

宗務院はカイサルに屈したのだ。

ロシアのキリスト教義問答は一〇〇ページほどの冊子であると言った。だが、じつはそれでは全く不十分なのである。ツァーと宗務院が出したものでなくて、トロイツキー修道院が、自主出版、したもうひとつのカティヒジスがあるからである。そのトロイツキー版カティヒジスは宗務院に桶ついているのか？ そうではない。逆だ。宗務院の黙許のもとに、宗務院版よりもさらにはげしく異端糾弾に乗り出している。トロイツキー版はその表題からしてすでに「正教弁護のカティヒジス」といわれる。ではその弁護は何に向けられているのか？ 表題のすぐ下に「分派およびローマ・カトリッ

パラレルがあるといえるが、それはあくまでいちおうであってそれ以上のものではない。明治のキリスト教はいわば外来の文物である。文明開花のひとつのワリエーションである。(かくれキリタンのことはこの際問わぬことにする)。それは階級的には主として上流有産者のものであり、その社会のひとつの「花」でさえある。文化史的にはそれは儒教への接ぎ木であった。これに対し、十九世紀中華以降のロシア神学校生徒はどのような意味でも上流社会の「花」ではない。それは食うや食わずの貧乏学生にとって手とり早い、「出世」の窓口であった。しかも彼らにとってはキリスト教はいわば土着の元木であったから、そこからの脱出とはまず還るべき故郷をみずから捨ててみずから退路を絶つことを意味していた。つまりそこは根源的な思想体系の変革が求められるところであったといわねばならぬ。外来の文物のひとつであるキリスト教に今日おつきあいし、明日はまたもうひとつの外来物であるマルクシズムにつき合うという気軽な日本の転位はそこにはありうべくもない。日本の転位は根づい基盤に根ざしている。明治以降の日本人はおおかたは今にいたるも帰るべき「くに」を持っていてそれが生活の根の元木となっているのだ。都市の生活は彼らの多くにとっては接ぎ木のさきの花である。帰郷列車、帰郷バスが盆正月に今もって仕立てられるというのはその端的な表現だ。このような二重底の故郷は今ではヨーロッパにもロシアにもすでない。ロシアについていえば、二月、十月の革命期には農民の帰郷がなお現存した。労兵ソビエトのうちの兵とは手とり早く言えば「軍服を着た農民」ということである。この兵たちの二重底が新生ソビエト・ロシアにとってどのような重荷であったかは、革命後五十年経った今も農民の労働者化

クの似而非教説を暴露する」とあるから明快だ。分派・異端との闘争——この明確な部門を受け持つものがトロイツキー修道院のカティヒジスである。

正系を守り異端を追放するのがカテキズムという名の図式的啓蒙書であるとなれば、これはロシア正教にのみ固有のものではない。だが、それはロシア世界の成立に大衆的次元でこのほか有効であったのではないのか。そしてロシアの革命ののちも今なお有効なものではないのか。ソビエト・ロシアで刊行される実用書に問答式のものが多いということに、(たとえば『住民のための法律百問答』に)それは端的にあらわれている。いや、少くともスターリン党史の叙述形式さえ、基本的には正教カテキズムに依っているといえるのではないか。

カテキズム(教義問答)がナロードニキのみならずマルクシストをも呪縛していたであろうことは容易に推察しうる。

ナロードニキ、マルクシストの多くはロシアのいわゆるラズノチンツイ(雑階級)に属していて、幼少年期に神学校を経由している。神学校は十九世紀中葉以降ロシアのラジカリズムの温床であった。チエルヌイシェフスキー、ドブロリューポフ、ミハイロフスキー、スターリン、ウォロンスキー——このように数え上げていけば、神学校生徒であった者をロシア革命運動のなかにほとんど無数に見出すことになる。

日本の初期社会主義者に元キリスト教徒を多く見るということと、ロシア革命家に元神学校生徒を見ることとの間にはいちおうのつながりがある。その意識において完成せず、農民が依然としてロシアの政治過程のバツシヴな挺子を成していることから容易に見てとれる。十月革命後のソビエト・ロシアはその「資本主義的発達」を農民において完成せねばならぬという課題を社会主義的建て前の内側で解かねばならなかったのだ。社会主義ソビエト・ロシアは、旧体制がすでに懐妊していた資本主義的農民を社会主義下で分娩せねばならなかったのだといってもよい。それに成功したであろうか？ スターリンが妊娠の中絶を性急に試み、農村集団化を強行しはした。だが農民はそのときすでに墮胎するには成長しすぎ、大きすぎる胎児であったのだ。ロシア革命が五十年後も余震をつづける所以である。

農民の解放にかかわるものとしてナロードニキ、エス・エルが生れたのは十九世紀中葉であった。広大な空間に散在する農民の教化はロシア・キリスト教会だけがまがりなりに行ってきたところなのだ。そしてそこではカテキズムが支配的な対話形式であった。神学校に学ぶ生徒は龐大な農民が折出する彼らのための知識人であった。神学校の生徒はカテキズムを踏んじていったが、このカテキズムの思考を否定するほかはないというところへ来てまず精神の自立としての文化革命をおのれの内へ迎えた。カテキズムから脱出することが当面の課題となった。その脱出口として科学に救いが求められる。軍人としてあるいは自然科学者として科学に接する機会があった者がまずカテキズムを超える。神学校からはこれはきわめてまれにしかもたらされなかった。クロボトキンに見るように、あるいはラヴロフに見るように、カテキズムに対する下剤は神学校出身者からではなくて、解放される者にとって本来敵であるところの者から、その対極から、貴族乃至その周辺から、もたらされている。文

化革命は下からではなくて上から来たということだ。

カテキズムからの脱出はあったか？ カテキズムからの脱出は農民自身によるものではなくて、労働者によるものであった。とりわけこの労働者に即したインテリゲンチヤによるものであったから、ロシヤ・キリスト教的カテキズムからの脱出は別種のカテキズムへと移りかねぬことになる。この別種のカテキズムとは科学の盲信ということか？ それもあろう。だがそれは一見そうであるということにすぎず、この別種のカテキズムとは農本のカテキズムと西欧の科学的カテキズムとのアマルガムであったのだといったほうがよい。それを体現するものとしてスターリンがある。

ネチャーエフの革命の思想が『革命の教義問答』として表現されねばならなかったことの中に、わたしたちはすでにカテキズムの呪縛のすさまじきを見る。この呪縛はスターリンを生涯にわたって捉え、そうすることによって、今日のロシヤ・マルクシズムに抜き難い刻印を押したといえる。ロシヤはついにカテキズムからカテキズムへと相わたるのか。

レーニンの文章を読む者は乱用に近いとまで言つてよい彼の定型的表现にお目にかかる。「一般的には………：特殊的には………：」という言い方がそのひとつだ。この表現がカトリシズムのカテキズムを經由した西欧のものであったか、それともロシヤ・カテキズムからのものであったかはあらためて仔細に問うべきことであろうが、私たちは小・中学校においてすべての科目に優等生であったレーニンをその通信簿にみているから（モスクワの革命博物館を覗いてみればよい）、ロシヤ・カテキズムからのものが基底にあると

見て大過ないだろう。

問、永遠の至福へと定める神の意図は信仰の教えのなかで特別の名称を持つていないであろうか？

答、それは神の予定といわれている。

問、神の予定は、これを人間とのかかり合いにおいて、一般的に、また、個人別々に、どのように理解すべきか？（傍点）

＝引用者

レーニンの「一般的には………：特殊的には………」とカテキズムの「一般的に………：個別に………」とは等価である。

スターリンに至つてはすでに本文冒頭の問答の形式をついにしていない。「カティヒジスとは何か」「カティヒジスとは………である」——つまり「Aとは何か？」「Aとは………である」のパターンにおいて、スターリンは、このAに代えるに代名詞を以てするとかいうことはきわめてまれにしかしていない。それがどのような思考を意味し、またどのようにロシヤ民衆の深部にアッピールするものであるのか、さらにまた、ジョルジヤ人であつてロシヤ人ではなかつたスターリンがこのほかそれを身につけるに至つたのはどのようなわけであるのか——それについてはいはずれカテキズムとスターリンの文章の対比において考察することにしよう。その際おそらく、「………とは何」という問いと「なぜ………か」との問いが全く発想の次元を異にするものであり、スターリンが前者に依るのはカテキズムの本質にかかわることだということを明らかにするだろう。

カテキズムとは問答の形式によるディクテーションである。問いはすでに答を含んでおり、従つて問うことは答えることであるとい

う自己完結の閉鎖的似而非問答がカテキズムである。「Aとは何か？」「Aとは………である」の対応においてAが反復されるのは問答無用の在り方を偽似問答の形で表わすことに伴つて出てくる「問はず語り」「語るに落ちる姿」をゆくりなくも示すものである。そもそも「………とは何か？」という問いはすぐれて啓蒙主義的であり、傲慢な姿勢を示している。ここにあるのは「対話」をいっこうに信じないにもかかわらず「対話」にこのほか依拠するという政治の姿勢である。対話ではなくて実は「押しつけ」を、おのれの意志のディクテーションを採るのが政治であろう。政治は対話を拒み対話を信じないことを本質としながら、対話を奨め対話を信じる形を採るほかはないものだ。パラドックスを意に介せずにいえば、対話の不信を信ずるところに政治がようやく成立する、ということである。レーニンの「一般的に………：特殊的に………」もこの信・不信のメカニズムと深くかかわっているはずだが、それについてはレーニンやらスターリンやらの文章そのものに即していずれ語ることにしよう。

さてさしあたり挙げておきたいのは自己批判の論理に関するものである。私たちは次の問答をカテキズムに見る。

問、何ゆえに信仰の告白が必要なのか？

答、使徒パウエル（パウロ）は救いのために必要なのだと証言

している。「それ人は心に信じて義とせられ、口に言いあらわして救われるなり」（ロマ書第十章の10）

問、救いのためにはなぜ、単に信じるだけでなく正信を告白せねばならぬのか？

答、なぜかというに、ひとときの生とか地上の利とかのゆえに正信の告白を棄却する者があると、その者はそのようにして救済者たる神に対し、また、未来の至福の生に対し、真の信心を抱いていないことを示してしまうだろうからである。

私たちはスターリンの肅清裁判における審問の原初的パターンをここに見るといっていいかも知れない。

被告は告白のプロセスを示さなければならなかつた。告白の結果のみを求めらる審問者は被告に告白のプロセスを求めたりせず、あらかじめ告白の文章を用意しておき、それに署名させれば足りたであろう。ところが審問者は、被告自身による告白を、告白のプロセスを執拗に要求しつづけている。「何ゆえに告白が必要なのか？」それはコムニズムの自己棄却に関している。まずコムニスト自身にとってコムニズムの棄却があつたことが告白されなければならぬ。しかもその棄却はコムニズムから発するものでなく、コムニズム以外の「ひとときの生とか地上の利とか」によるものでなければならぬ。肅清審問のコンテクストにおいては、それは、資本主義諸国に通謀してそこから「ひとときの生の利を、地上の利を」得ることとせられらぬ。「心に信じて義とせられること」乃至正義とせられることを、「口に言いあらわして」救われるべきだといわれるのであるが、言い表わすことを許されるところのものは、今見たものに限られる。「自己棄却」はカテキズムにおいては「オトレカ

「オトカザーツァ」であり、スターリン粛清にあつては「オトカザーツァ」であるが、それは「オトレカーツァ」が廢語と化し、「オトカザーツァ」がそれにとつて代つたことだけのことであつて事柄の本質を変えるものではない。

ペテロ外にて中庭に坐するに、一人の婢女きたりて言ふ「なんじも、ガラリヤ人イエスと借にゐたり」

かれ凡ての人の前に肯はずして言ふ「われは汝の言ふことを知らず」

かくて門まで出で往きたるとき他の婢女かれを見て、其処に在る者どもに向ひて「この人はナザレ人イエスと借にゐたり」と言へるに

重ねて肯はず契ひて「我はその人を知らず」と言ふ。

暫くして其処に立つ者ども近づきてペテロに言ふ「なんぢも礎にかの党与なり、汝の國訛なんぢを表はせり」

爰にペテロ盟ひ、かつ契ひて「我その人を知らず」と言ひ出づるをりしも、雞鳴きぬ。

ペテロにはとり鳴く前に、なんじ三度われを否まん」とイエスの言ひ給ひし御言を思ひ出し、外に出でて甚く泣けり。

(マタイ伝第二六章の六九〜七五)

「肯はず」と消極的に、「否まん」と積極的に、訳出されていることばはロシア語ではいずれも「オトレカーツァ」という一語である。(口語訳では「肯はず」が「打ち消して」、「否まん」が「知らないと言う」と置きかえられて、「オトレカーツァ」(自己棄却)からますます遠くなつた。)消極・積極いずれにせよ「オトレカーツァ」は、いわば初心をもぎとられる思いでみずから初心を

もぎとることを示し、人間精神の劇を構成するものである。このことばなくしてはマタイ伝のこのくだりの劇的性格はほとんど半減する。それを移しうることを私たちが日本人が持たぬことが、ペテロの悲劇の理解を困難にしている。わたしたちにとつて分りやすいのは社会的位相にあるロイヤリティの明証として宣言される「義絶」とか「勘当」とかにおける「絶つ」ということばであろう。これは社会に対するロイヤリティとしては積極的だが、私的な次元ではすぐれて消極的なものであり、いわゆる義理人情の葛藤として劇を構成する。ソビエト・ロシアで「収監された夫と絶つ」、「反革命に走つた父と絶つ」という場合の「絶つ」は日本の「義絶」に近い。だが思想の内側において絶つとなれば、それはもはや社会的ロイヤリティの次元を、おつきあいの次元を、超えていて、自己との対決に始まる自己の棄却に關してくる。

カテキズムにおける「オトレカーツァ」と現代ソビエト・ロシアにおける「オトカザーツァ」のちがいは「事柄の本質を変えるものではない」と言つたが、それは「本質を変えるものではない」  
|| 「本質を同じうする」ということではない。廢語と現代語の差はカテキズムの時代と現代との差でもある。(未完)

(一九七二・三・一)